散乱

とーしん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リライズ最終回のカザミの動画を見てＧＢＮを始めたいと思った子がＧＢＮを始めたら、不思議な少女原作主人公に会って弟子入りする話。

カンさん主催のビルドダイバーズ杯（ビルド杯）の作品です。

他のビルド杯作品もお願いします。

目次

GBNにようこそ／師匠降臨 ―― 1
ビギニング30／パーツC ―― 24
ビギニング30／変身と正体 ―― 31
出会い／スタート ―― 42
出会い／ダッシュ ―― 45
もう／私が居たから ―― 56

ＧＢＮにようこそ／師匠降臨

黒い空、星が光る夜に、ぽつりとひかる部屋。
灯りがついてるその部屋には一つのプラモと一つの動画。

ＨＧ　ＧＮ―００１　ガンダムエクシア
それが部屋の机に立っているプラモの名前。
機動戦士ガンダムシリーズ　　に登場する兵器、モビルスーツを模したプラモデル、いわゆる［ガンプラ］と呼ばれる物だ。
辺りにはニッパーでパーツを取り出す際に出たプラスチックの破片や既にパーツが取られたランナーが散らばっている。
「……これ捨てていいのかな？　何ゴミだろ？」
そのガンプラは、たった今完成した。
ガンダムエクシアを作ったきっかけは今タブレットで流れている、あるオンラインゲームの映像だった。
世界中の人が、機動戦士ガンダムに出てくるＭＳに乗って異次元から来た敵を倒す……そんなゲームのイベントミッションの動画。
すでに３０００万回は再生されており、その動画が人気なのがわかる。
この動画の影響で、ガンプラを初めて作った。

そして明日、今の時間は午前２時なので今日ではあるのだが、気分的には明日
作ったガンプラで空を飛ぶ日だ。

「……お腹すいた」
目を擦りながらゆっくり２階の部屋から１階へ降りていく。

昨日徹夜してガンプラを作ったからだろう、体が怠くてしょうがない。
目なんて毛の大きさに負けるぐらいの開き具合だろう。
「おはよぅ……お母さん……」
「おはよう……って眠たそう、昨日何時に寝たの？」
「あ……えーっと……１０時ぐらい……とか？」
「少なくても1時までは明るかったですが？」
「うっ……タブンキノセイダヨ……」
「ふーん……今日初めて行くんじゃないの？　ＧＢＮって所」
そう……先週誕生日を迎えるえて１４歳になった俺は、誕生日プレゼントにガンプラを貰ったのだ。
ずっと行きたかった《ガンプラバトル・ネクサスオンライン》
通称ＧＢＮというオンラインゲームで遊ぶ為だ。
ＧＢＮは自分の作ったガンプラに乗り、動かせる場所。
ガンプラがなくてもログインできるらしいが、どうせなら自分の作ったガンプラに乗って色々な事をしたかった。

「うん、ガンプラ完成したから早く行きたいんだ」
「もう完成したの？」
「まあ結構ミスったけど、なんとか朝までには」
「……昨日遅くまで起きてたのね？」
墓穴を掘ってしまった
「なるほどねー……いつも遅くまで起きるようになるんなら……わかるよね？」

「起きません！　起きません！　はい！　規則正しく生活します！」
偶に威圧的になる母の眼、これには逆らえない……逆らったが最後、どうなるかは簡単に想像できる。
……少なくてもエクシアはタダではすまないだろう。
遂に遊べるタイミングで取られる訳にはいかない。

「よろしい。じゃあ、ご飯どうぞ」
「はーい！　頂きます！」
必死さが伝わったのか、なんとか無事に乗り切れた……
「……楽しみだな、ＧＢＮ」

味噌汁と鮭と白飯、いつもより少し光ってる気がした。
朝ご飯、美味かった。

青い空、太陽が少し照りつける昼下がり

「エクシアよし……電車賃もある……お昼ご飯も大丈夫……よし」
「あ、もう行くの？」
「うん、いっぱい遊びたいから」
「そっか、行ってらっしゃい！　カイト！」
「お母さん！　行ってきます!!」

最寄りの駅から5分ぐらい
赤レンガ倉庫と等身大のエールストライクガンダムが立っているのが印象的なガンダムベース横浜

ここは初めてガンプラを買った場所だ。
店員さんも優しかったし、近くの飲食店も美味しい場所がある。
ＧＢＮの筐体も置いてあって、
プラモを作る事のできるスペースもあって、
ＧＢＮを遊ぶにはうってつけの場所だと思う。

「あ、カイト君いらっしゃーい！　遂に今日初めての？」
「はい、ＧＢＮやりに来ました！」
入店したら早速マツムラさんが笑顔で話しかけてくれた。
マツムラさんはこの店の店長で、よく笑っている気さくな人、
この店が柔らかい雰囲気なのはこの人が居るからだろうと思わせるような人だ。
「いやー……この前ガンプラを買いに来たと思ったらもうＧＢＮデビュー……時の流れは早いね……初めてのおつかい見てるみたいだ」
「初めてのおつかい」
マツムラさんは昔家が近所だった事もありそれなりに昔からの知り合いだった。
それこそ初めてのおつかいに出れる年齢から知り合ってる。
昔勧められて００を見たな……そんな思い出も気がつけば１０年くらい前の事になっていた。
昔から明るいのは変わらない、腰の辺りは変わってきたようだけど。
「よし登録完了！　いってらっしゃい！」
「ありがとうございます！　楽しんできますね！」

ガンプラ売り場の奥にある部屋に入る。
そこにはＧＢＮの筐体が置かれていた。
早速マツムラさんに言われた通り、専用のヘッドセットを装着して、
角が丸い三角形の小型端末、ダイバーギアを筐体にセットする。
『ＩＤ　ｄａｔａ　ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ　ｐｌｅａｓｅ　ｓｃａｎ　ｙｏｕｒ　Ｇｕｎｐｌａ』
エクシアをダイバーギアの上に載せる。エクシアが光に包まれて、エクシアのデータが読み込まれる。
『ｌｏｇ　ｉｎ　ｄａｔａ　ｃｏｎｆｉｒｍ．』

『Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』

『Ｄｉｖｅ　ｓｔａｒｔ　ｎｏｗ！』
自分の作ったガンプラで飛ぶために
熱くなるバトルを自分も出来たら。
いっぱいの期待が膨らんでいく。
思いは重りになって
電子の海に潜り込んだ。

目を開けば、そこは本当の現実のようだった。
電子で構成されたとは思えないような、柱だったり道だったり、人間、猫……猫？
「えっと……店長が確かミッションカウンターでミッションを選べって言ってたな」
ＧＢＮ　はとてつもなく広い。各ガンダムシリーズに出てくる町、草原に海、宇宙にはコロニーや基地、軌道エレベーターなど様々な場所に行く事ができる。
店長はそこで練習用のミッションを選んで
「自由にガンプラを動かしたり、弱いＮＰＣ相手に肩慣らしをしたり、好きな事をしなさい」と言っていた。
ミッションカウンターはログインしたら最初に入るロビーの中心にあり、そこの受付でミッションを受注する。
ミッションも、戦闘するミッションから戦闘が必要無いミッションまでいろいろある。らしい。
それにしても……
「人多いな……」
ＧＢＮ　は世界中で人気のオンラインゲームだ。
アクティブユーザーは２０００万人以上居るらしく、人が多くて当

然ではあるのだが、ミッションカウンターに大勢の人が並んでいる。
初めてのミッションは、まだ時間がかかりそうだ。
初心者用のカウンターとかないかな……ないみたい……

仕方がないので近くの椅子に座って時間を潰す事にした。
周りを見渡すと、みんなミッションカウンターに並んでるか、上のモニターで流されている中継の映像を観ている。
モニターにはエールストライクガンダムとガンダムＡＧＥ１がベースだろうか？　カスタマイズされた青いＡＧＥが戦っている。
両肩に付いているＣファンネルが印象的なその機体は、敵対しているストライクの持っている、本来はソードストライクの武装である対艦刀シュベルトゲベールと、背中に付けていた大剣で鍔迫り合いをしていた。
白熱するバトル　激しく動くガンプラ
繰り広げられる大迫力のバトル、思わず見惚れてしまう。

「――――――――お？　見ない顔だな、お前初心者か？」
戦闘を見ていたら突然他のプレイヤーに話かけられる。
ザフトの制服を着た、オレンジ色の髪の男性だった。多分ガンダムＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙのハイネ・ヴェステンフルスがモチーフのアバターなんだろう。

猫耳を付けている。
「今日は人が多くて大変だよな……」
「あ……そうですね。いっつもこうなんですか？」
「いや、いつもはそこまでだよ。ただついさっき新しいイベントが始まってな、みんな早く遊びたいのさ」
「あ……そうなんですね」
「……もしかしておまえ、今日が初めてか？」

「え？　……あ、はいそうです。今からミッション受けようとしたら……」
「なるほどねぇ……そうだ！　いい事教えてやるよ、まずはコンソールパネルを開きな」
「えっと……これか」
「そう、そして設定画面を選択して
「設定を選択……」
　そして左から四つ目の項目をタッチ
「左から四つめをタッチ……」
　二番目のタブの上から五つ目の項目を選択して
「……よし選択」
　で、ＯＫを選択だ」
　言われた通りに設定をいじっていく。
「……これでどうなるんです？」
「これでいつもは制限されてる動きが出来るようになるんだ、
　初心者用のリミッターみたいなやつだな」
「なるほど……ありがとうございます」
「なぁにいいって事よ。俺、ハイネスって言うんだ、よろしくな！　ＧＢＮにようこそ！」
　あ、名前スをつけただけなんだ
「カイトです。よろしくお願いします」
「おう！　ＧＢＮ、楽しんでくれよな！」

　そう言った後に彼は去っていった。
　ちょうど受付も空いたようだった。
　親切な人に会えた事を感謝しながら受付へ向かう。
　早速受付の前に来ると、受付の女性が話しかけて来た。
「ようこそ。ミッションを選んでください」
　現れたモニターを見て参加できるミッション一覧を見てみる。
　自由にフィールドで戦うフリーバトル、初心者向けのチュートリアル。今日限定の特別なサバイバルミッション。

いろいろなミッションがあった。
上のモニターで流れているのは、さっき説明を受けたイベントミッション、今週限定のサバイバルミッションの映像のようだ。
どのミッションを受けようか、とりあえずばーっと最後の方までミッションを見ていると、一つのミッションが目に留まった。
「……採取は誰の為に？」
そのミッションはワールドマップを移動してヤナギランを回収して戻ってくるという。花の採取ミッションだった。
これなら花を探す間にエクシアの試し乗りも行えそうだ。
〈ＯＫ〉
今日飛ぶ空が決まった。ワクワクしながら……
「……どうやって出撃するんだ？」
少し手間がかかったが、無事出撃できた。

青い空に、青い天使が飛ぶ。
「……お――……」
ガンプラが本当に動いている。小学生みたいな感想というか、自分の作った物がちゃんと動いて達成感と感動が生まれてくる。
まっすぐ、横に、上に、下に、縦横無尽に空を駆けるエクシア
森を下に、空を上に、川を見下げたり、街を見上げたり。
プレイ動画を見てはいたがこんなに自由に動けるとは思わなかった。
さっきもらったアドバイスのおかげだろうか。

「風が気持ちいい……気がする」
エクシアに乗っているので風は当たらないのだが、このスピードで飛んでいるとそんな気がする。
そうやって空を飛びながら花を探しているが、一向に見つからない。
場所を間違えただろうか？　体感だが２０分ぐらいは飛んでいる気がする。
そう思い横を見た次の瞬間、草原の奥、地平線の下に綺麗なピンクのような、紫のような花がいっぱい咲いていた。
「もしかしてあれが……＜　ｃａｕｔｉｏｎ　＞……へ？」
突然けたたましいアラートが鳴る。前方には巨大な木。
「うわぁ⊠」
なんとか木は避けたが、気がとられて操作が狂ってしまう。
気がづけば地面に突撃していく。辺りは一面は草原
――そして、少女が１人。
「――ッ!!」
おもいっきり操縦桿を左にたおす。
視界の先の少女に落ちないように全力で。

草原に、固くて重い音がした。

「ごめんなさい!!」
どうしよう
「ごめんなさい……つい余所見をしてしまって！」
「ぶつかってないし大丈夫だよ？」
自分より背の低い、紅葉色の長い髪を揺らしながら彼女はこちらを

向く。
　いきなり飛行機が自分に向かって突っ込んでくるようなものだ、相当恐かったとおもったが、彼女はけろっと、何もなかったように話す。自分なら多分泣く。
「この子かわいいね～」
　隣には頭から地面に突っ込んだエクシアがあった。
　ところどころが草と土で汚れてしまった。

「かわいい……えっと……ありがとうございます」
「ん～？　あ、敬語はいいよ～」
「えっと……はい」
「この子楽しそうに笑ってて、こっちも楽しくなるね～」
　エクシアが笑っている。自分にはエクシアがアンテナ一つ動いていないように見える。
「笑ってる……？」
「うん～、今落ちるのが楽しかったって」
「案外エクシアってタフなのかな？」
　彼女はまるでエクシアと、ガンプラと話せるようだった。
　不思議な子だ。不思議ちゃんだった。

「……ガンプラって何か考えたりしてるの？」
「うん！　もちろんだよ～」
　自分に聞こえない、きっと大体の人が聞こえない声が、彼女には聞こえているみたいだった。
「ここで一緒に飛ぶの、すっっごく楽しみにしてだんだよね。初めてのＧＢＮが嬉しくて」
　初めてのＧＢＮ――彼女には一言も初めてだって言ってない。
　まるでエスパーか何かのようだった。
「ねえ君～名前は？」
「えっと……カイト……」
「私モカ！　、ちょっと行きたい所があるんだ～。

マップだと直ぐって描いてあるから多分すぐ終わると思う……多分」

ＧＢＮ初日、言葉が常時ふわふわしてる子と会った。

「見つけた」

自分が受けたミッションの目的地であるヤナギランの群生地に彼女も行きたいらしいが、道に迷い、自分のガンプラも出せないらしく、エクシアに一緒に乗る事になった。

「地図みれたんだ……」

「知らなかったの～？」

「しらなかった……」

モカとエクシアに乗りながら地図の出し方を教えてもらう。

これでヤナギランの群生地にたどり着けそうだ。

「ヤナギランがいっぱい生えてるところで、師匠と待ち合わせなんだ～」

「師匠って？」

「師匠は……師匠だよ？」

「あ、うんそうなんだけど……じゃあ何であそこに居たの？　結構遠いよ？」

「なんか気がついたらあの草原に居てね～」

「方向音痴？」

「そうそれ～！」

彼女はマップが見れても迷ってしまうようだ。

それに対して自分はマップの出し方も分からなかった。

おかげで採集ミッションを無事クリアできそうだった。

「あれだー！　見えてる～？」

「おぉー……！　綺麗な花畑だね」

モニターの先に広がるのは、一面に広がる赤紫のヤナギラン。

一つ一つが綺麗に立派に咲いていた。

「ありがと～助かったよ～」

「いや、こっちも助かったよ。ありがとう。……いい場所だね、ここで待ち合わせするの、なんかいいね」

「おー！　同志だ～！　師匠もここ好きなんだって～！」

綺麗な花、青い空、偶にはここに来て遊んでみたりしてみたいなんて考える。

遊ぶといっても花を見るだけになるだろうけど。

「あ！　そうだ～！　フレンドになろー！　フレンド！」

「あ、フレンド登録？」

「そー！」

モカに指摘され、フレンド申請を送る。彼女からもフレンド申請が来て、お互い承認する。

「フレンドになるとログイン状況とか、フレンドバトルとか出来るんだよ～」

「へー……バトル強いの？」

「いや、私も最近始めたからまだまだなんだ～。

バトルは師匠の下で修行中なのだ～」

「師匠か～……俺も師匠欲しいな～……」

ついさっきＧＢＮを始めたばかりで知識もバトルの経験も無い自分にとって、いろいろな事を教えてくれる師匠のような人が居てくれると助かる……という意味で行ったのだが、

師匠が欲しい。その言葉に彼女が反応する。花が咲いたような笑顔、さらに咲いて満開になる。

「あ！　じゃあ弟子になるのはどう～!?」
「モカの師匠に？」
「そうだよ弟弟子～！」
「弟子入りするって言ってないけど???」
「フレンドになったから修行に遅れる時は師匠にまだログインしてないとか言っとくね～」
「強引な宗教勧誘かな？」

どすん、とエクシアが着陸する。
――――――その時
突如前方の花々が爆発した。
「「☒」」
後ろからのビームによって目の前のヤナギラン達が燃えている。
さっきまで綺麗に咲いていたヤナギランは、一気に飛び散った。
綺麗な紫が、黒い塊、焦げた何かになり果てる。
「あ……ヤナギラン……」
モカの悲しそうな、小さな声が、耳に入る。
さっきまでの嬉しそうな、楽しそうな顔は花と一緒に吹き飛んでいた。
「一体……何が☒」
〈ｃａｕｔｉｏｎ〉の警告が鳴り響く。
後ろからの攻撃に反応している。

後ろを振り返る。
後方には二機のガンプラがこちらに銃口を向けていた。
一機は機動戦士ガンダムＳＥＥＤに登場するザフトの量産型ＭＳ、ゲイツ。
そしてもう一体、こちらはＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹの機体、オレンジ色のグフ、グフイグナイテッドをベースにカスタマイズした機体と思われるガンプラ、デスティニーの光の翼が付いている。

『やっと見つけたぜ……カイト君！』
「その声……ハイネスさん⊠」
グフイグナッイテッドの改造機から、さっき助けてもらったハイネスさんの声が聞こえてきた。
何故彼が襲ってきたのか、訳がわからなかった。
『さっきお前に弄ってもらったのはフリーバトルの設定でな、俺達に狩られてもらうぜ！』
「なっ……！」
さっき、というのは彼と話した時の事だろう。
彼が裏ワザのように言っていたあの設定変更がフリーバトルの設定だったんだと気づいた。
気づいた時には　もう花は燃えていて
『つまりお前を撃墜して、ポイントを稼ぐってわけよ！』
グフイグナッテッドの改造機がバックパックについているディスティニーガンダムの装備、高エネルギー長射程ビーム砲をこちらに向ける。
銃口が輝き、赤い光が飛んでいく。

花弁が舞う、風に乗って舞い、上がって、上がって、上がって、光に焼かれる。
花が焼けていく。空気が熱を帯びる。
二体一、しかもこちらは今日始めたばかりの初心者、逃げる事しか

できない。
話しかけてきた優しいお兄さんと思っていたが、初心者狩りだった。
ここはネットの世界、ＧＢＮも例外ではなく、もっと警戒するべきだったと後悔する。

展開される弾幕
逃げる　逃げる　逃げる
森に入って、川を越え、大きな岩壁を盾にして。

だけど、意味を為さない。

「そろそろ決めちまうぜ!!」
「──っ！　逃げきれない!!」
エクシアが右腕に装備しているＧＮソードをライフルモードにして構える。
照準を合わせビームを放つがグフは残像を残しながら簡単に避けていく。
「経験が違うんだ！　簡単にはやらせないぜ！」
オレンジ色の光の翼を展開しながら高速で接近してくるグフ。
「俺がカスタムしたグフヴェスティージ!!!
素組みとは違うんだよ！　素組みとは!!!」
すれ違いざまにグフの腕に付いている鞭、スレイヤーウィップで盾を奪われ、そのまま近くの谷に飛ばされる。

「そこだぁ！」
グフヴェスティージが再度、高エネルギー長射程ビーム砲を構える。
「堕ちろぉッ！」
赤色のビームの激流が放たれた。

空に流れるその激流は、全てを飲み込もうとする龍のように迫ってくる。
「カイト！」
「っ!!」
「させるか!!!」

エクシアの回避行動に合わせて、ジンがアサルトライフルを放つ。
「しまった☒」
エクシアの動きに合わせて放たれたその銃弾は引き寄せられるようにエクシアの太陽炉に命中する。
空中で動けなくなったエクシアは、赤の波に飲み込まれた。

谷に落ちたボロボロのエクシアを、グフヴェスティージとジンが見下す。

エクシアの盾は少し遠くに刺さっていて取れない。
谷に墜落した際の衝撃で体が痛む。
「カイト!!!」
「大丈夫……まだ……こいつ……動く！」
先程のビームでエクシアは足を失い、盾も使えず、太陽炉も破損していた。
ＧＮソードも先の攻撃で壊れている。
太陽炉がやられたので太陽炉搭載機の切り札とも言えるトランザムも使えないだろう。
けれど、まだ、きっと動ける。

まだ……まだ……何とかして、何とか
操縦桿を必死に動かす。
前へ　上へ　アイツらへ
けど、聞こえるのはエラー音だけ。
無慈悲に銃は向けられる。
「避けられると思うなよ!!」
ハイネスがグフのビーム砲に光を収束させ、こちらに向ける。
「まだ……!」
どんなに必死に動かしても、エクシアは動かない。
既に限界のエクシアはこれ以上動けない。
悲しませてしまった。
彼女のお気に入りの場所を、綺麗だなと思った場所を、自分が騙されたせいで消してしまった。
せめて、彼女が　かわいい　と言ってくれたこいつだけでも守れたら良かった

「……カイト」

モカが祈るように手を合わせる。
奇跡を祈るように。

赤い光が、飛んでくる。
「避けられると思うなよ!!」
高エネルギー長射程ビーム砲に光が溜まる。
谷でボロボロで寝ているエクシアに銃口が向けられる。
――――次の瞬間
ビーム砲が、撃ち抜かれる。
「なにぃ……⊠」
咄嗟にビーム砲をおもいっきり前に投げ捨てる。
次の瞬間にはビーム砲は爆発し、爆煙を上げながら下に破片が落ち

ていった。
「緑のビーム……⊠」
　さっきのビームは上空から降ってきた。
　すぐさま上空にビームライフルを向ける、だが上空には何もなく、ただ青い空が広がっていた。
「どこに行きやがった……⊠」
『ハイネス！　後ろだ!!!』
「は……⊠」
　ジンからの警告、一瞬遅れてグフヴェスティージの警報も作動する。
　だがその時には
「ぐぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
　グフは胴体を真っ二つに切られていた。

「ハイネェェェェェェス!!!」
　下半身と上半身に分かれたグフが爆散する。
　倒されたハイネスの名を叫んだジンに乗っているダイバーがグフを切ったガンプラに照準を合わせようとする、だが
「また……消えた？」
　さっき確かにグフヴェスティージをすれ違いざまに切った機体は、既に視認できなくなっていた。
「あの速さ……あの光にあの色……まさかトランザムか!?」
　ＴＲＡＮＳ（トラン）－ＡＭ（ザム）システム、機動戦士ガンダム００　に登場するＧＮドライヴ、太陽炉とも呼ばれるこの装置に搭載されているシステムで、太陽炉本体、ＧＮコンデンサーに蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで機体が赤く発光し、一定時間ＭＳのスペックを３倍以上に上げることができる。

　トランザムで加速したガンプラの目で追えない程の高速移動に翻弄されながらも、なんとか食らいつこうとするジン。
「そこだ！」

紅い機影に対してアサルトライフルを撃ち込むが、気がつけばもうそこには何も居ない。
「また居ない……？　機体が量子化したのか!?」
まるで最初から居なかったと錯覚させるほどの高速移動、ジンも、ジンのダイバーもその速さについて行けなかった。
「〈ｃａｕｔｉｏｎ〉上か!!」
ジンのセンサーが上方向からの攻撃を察知する。
急いでライフルを上空に向けるが
その瞬間には、頭を緑のビームが撃ち抜いていた。

上空で起こった出来事に、ただ驚いていた。
グフとジンを超スピードで圧倒したあのガンプラ
「あれ……は……」
そのガンプラを、見た事があった。
自分がＧＢＮを始めるきっかけになったミッション
──あの大戦で、ボスへのラストアタックを飾った2機のガンプラの内の一体。
そのガンプラの太陽炉から放出されているＧＮ粒子が、鳥のような、蝶のような羽を形作っていた。
上空に佇んでいる機体が、トランザムが切れて燃えるようは紅から、元々の色に戻っていく。
そのシルエットはまるで、フリーダムガンダムやデスティニーガンダムの要素を加えた
「白い……ダブルオーガンダム……」

「師匠〜!!!　師匠遅いよ〜!!!」
　モカがエクシアの通信を使って、白いダブルオーを駆るダイバーに話しかけ……
「え？　師匠？」
『モカ、大丈夫?!　君も！』
「大丈夫〜！」
　モニターにダブルオーのダイバーの姿が映る。
　茶髪で、空色の服を着ている、自分より背の高そうな青年。
『モカは大丈夫そうだね……俺、リクって言うんだ、うちのモカが迷惑かけてない？』
「えー師匠〜!?」
「……カイトです……」
「ん？　カイト何で緊張してるの〜？」
「いや……見た事ある人だったというか……憧れててた人の1人だったというか……」
『あ、俺を知ってるの？』

　これが師匠と、師匠のダブルオースカイメビウスとのファーストコンタクトだった。

　夕暮れ、赤色の空にダブルオースカイメビウスが照らされていた。
　草原に跪くダブルオースカイメビウスは絵になるというか、ガンプラの完成度がそのまま美しさに直結しているようだった。

「そっか……モカが道に迷ってるのを助けてくれたんだ」
「はい……ただ……モカを乗せてる時に初心者狩りに絡まれてしまって」
「やっぱりか……モカからのメッセでエクシアに乗せてもらってるのは分かってたし、あのガンプラ、最近初心者狩りが乗ってるガンプラだって話題になってたんだ。取り返しのつかなくなる前に何とか出来て良かった」
　モカの師匠――フォース〔ビルドダイバーズ〕のリクさんはモカとの約束の場所に向かう途中に、エクシアに乗って逃げてる間にモカが送ったメッセに気づき、急いでモカの居る所に来たらしい。
「あ、そーだ師匠～！」
「モカ？」
「あのね！　カイトを弟弟子にしたいのです！」
　モカがついさっきから言っている弟弟子の話をリクさんに切り出す。
「いやそんな急に……」
「あの……俺からもお願い出来ませんか？」
「……え？」
「お☒カイトもやる気だ～！」
「さっき、自分が騙されたせいで、モカの好きな花が目の前で燃やされてしまいました……それに、エクシアだって……だから、もっとＧＢＮの事を知って、エクシアもと一緒に強くなりたいんです！　あんなにボロボロにならないように……したいんです。だから……お願いします！」
　今思ってる事を、後悔を言葉にする。
「……そこまで言うなら……モカは？」
「ん～？」
「弟弟子は「欲しい！」……よし！　なら決まり！」
「……いいんですか？」
「うん！　いいよ。あんまり教えるの、上手くないかもだけど……」

「っ――はい！　よろしくお願いします!!」
そして
「……モカ、あの花……ごめんね……もう何輪残ってるのか」
「？　……明日にはまたあるよ??」
「え……？」
「うん、明日には元気に生えてるよ、２４時間周期で町とか、花とか、元に戻るんだけど……」
顔が一気に熱くなる。さっきの独白は何だったのか。
「……」
「……しらなかったんだ～……あ、今日がＧＢＮデビューなんだったね～」

考えてみればここはゲームの世界。
ましてやガンプラが本当のＭＳのように動いたりビームを出したりする世界だ。
グラフィックは凄くリアルだし、感覚もあるが、基本はすぐ元に戻るに決まっていた。
「……まぁ気持ちは分かるよ！　アップデートがあってから、匂いとか味とかもっと本物みたいになったし！　感覚がフィードバックされるようにもなったし！　俺も偶にびっくりするぐらい！」
リクさんが必死にフォローしてくれる。
優しい……けど痛い……

「けどそっか……今日初めて……よし！　じゃあとりあえず――――
「あ、私も言う～！」
え？　じゃあ……一緒に、せーのでいこう、せーの」
「は～い」
「せーのっ――――

――ＧＢＮにようこそ！　これからよろしくね！　カイト」君！」

ＧＢＮ初ログインは、何かと踏んだり蹴ったりだった。

けど、最初の仲間が出来ました。

ビギニング３０／パーツＣ

「ねえ師匠～相談相談～」
「モカ？　どうしたの」
「あのね……ヒソヒソ……」
リクがモカが自分から何が提案するのは珍しい事ではなかった。
リクとしては特に断る理由が無かったので断っていない。
ただ、今回はいつものような「あのジュースが飲みたい」とか、「あの花を見てから修行したい」という、修行を頑張る為の要求じゃなく、修行の内容の事だった。
課された課題に不満を言った事の無い彼女にしては、珍しかった。
「え？……コソコソ」
「そこをなんとか～」
リクとモカが小さな声で会話をする。
誰にも聞かれないように、ひっそり、こっそり、秘密の会話。
別に聞かれて困る話ではなかったが、そこはモカの気分だった。
何となく、その方がいいと思ったから。

今日は曇り空、雨が降るらしい。
今日は師匠とモカとの初めての修行の日、具体的にどんな修行をするかは聞かされてないが、自分からも修行を乞いた以上、遅れる訳にはいかないので早めに目的地に着くようにしたい。すくなくても５分前、１０分前ぐらいが理想だろうか。
そう思い、折り畳み傘を持って、家を出た。

「あ、カイト～」
「おーい、カイトーこっちー！」
「今行きまーす！」

ＧＢＮにログインしてすぐ、ロビーで２人が手を振りながら呼んでくる。
こちらも手を振り返していく。
「すまません。時間間違えましたか？」
「いや、約束の時間までまだ１０分前あったから大丈夫だよ」
リクさんは優しい笑みを浮かべながら言葉を返してくる。
爽やかな系イケメンというか、正統派イケメンというか、何だろう……イケメンだった（語彙力消失）
彼女がいてもおかしくないが、そこら辺はリアルの事なので聞くのは憚られる。もっとも、アバターは自由に設定できるのだが。
ＧＢＮの魅力の一つに、アバター容姿がある。
本当に幅が広い。男女大人子供はもちろん、犬、猫、さらにはガンダムシリーズに出てくるロボット、ハロの姿にもなれる。
もしかしたら、ドラゴンとか、鳥とか、狼男だって居るのかもしれない。
「どうしたの？　何かついてる？」
じっとリクさんを見てたら、流石に気づかれたようで、リクさんは、自分の服に何かついてるのかと思ったのか、自分の服を何かを探すように見ている。
「あ、えっと……アバターよくできてるなーって……」
それっぽい事（実際そう思ってはいた）を言ってごまかす。流石に「イケメンだと思いました」なんて言うのは無いだろう。
「え？　そうかな……俺のアバターほぼリアルだけど」
「いやリアルでガチのイケメンとは恐れ入った」
そうだったんだ……というかリアルに似せたアバターなんですね

「「逆になってる心の声と反応が逆になっちゃってるよ」」
ＧＢＮはリアルと同じような姿のアバターでログイン出来る。
特に容姿の設定などをしなかったら初ログイン時にランダムで服が選ばれ、リアルに似た姿でＧＢＮを移動する事になると初ログイン時に注意書きに書いてあった。
リクさんもリアル寄りのアバターだったとは……まさかこんな所で顔面偏差値バトルが勃発するとは思わなかった（勝手に比べてるだけだった）
「わかる……わかるよ～イケメンだよね師匠は～……彼女も居るし優しい、ガンプラも出来る。この男すごいよ～！さすがビルドダイバーズの義兄さん～！」
「いやだからサラは彼女じゃないよ……」
「いんや！　姉さんと師匠はもう付き合ってるどころか同棲よ～！」
「彼女も居るんだね師匠……」
「いや違うってば!?」
リクが顔を少し赤らめながら必死に反論する。年相応の話題とも言えるだろう恋バナは、修行の予定が削られながら1時間続いた。

「だいたいモカ、サラと俺はそんな関係じゃないよ。そりゃ、仲良くできてるとは思うけど、そんなふうに見えるの？」
「うん、そう見えるって、マントを付けた白い仮面のアヴァロンの人が言ってたよ～？」
「……」
次の日、リクはＧＢＮ最強のダイバー、クジョウ・キョウヤに過去最高の善戦をしたのは別の話である。

「そういえば修行って何をするんです？」
まだ修行の内容を聞いた事のなかったカイトが、今から何をするのか質問をする。
普通はもう少し前に修行を始める予定だったが想像以上に会話が

荒野にそびえ立つエアーズロック以上の盛り上がりを見せてしまい、まだ何も知らずに取り敢えずリクとモカについて行っていた。
「いつもはモカと一対一で戦ってるんだけど、今回は、たまには他の相手と戦うのもいいかなって思って、ミッションの舞台の近くのここに来たんだ」
「それで宇宙に……」
「宇宙はいいよ～。フワフワするんだ～」
３人が来たのは、機動戦士ガンダムの、最終決戦の舞台、ア・バオア・クーを模したエリア。キノコのようなこの要塞の周りで戦う連戦ミッションを２人で受けてさせようと考えていた。
「連戦ミッション？」
「連戦ミッションって言うのは――」
連戦ミッション、簡単に言えばボスラッシュである。
途中の休憩を挟みつつ、敵を倒し、最後のボスを倒すとクリアである。
最終決戦には、デビルガンダムだったり、アルヴァトーレだったり、デストロイガンダムだったりと強敵が出てくる。
「このミッションを、モカと２人でやって欲しいと思って」
「なるほど……そういえばモカの機体って何？」
モカの機体、そういえば、まだ一度見た事のないと思い、モカの方を見る。
「……あれ？」
「あー……多分また道に迷ってる」
モカはもうそこには居なかった。
モカは方向音痴なだけでなく、気がつくとふらっとどこかに行ってしまう。
１０分後に、タピってるモカを発見した。
「もう……どっかに行かないでよ……」

「えへへ……ごめん～後でタピオカあげるから～」
「いやさっきいっぱい食べた」
　宇宙に浮きながら連戦ミッションの場所に向かうカイトのエクシアとモカのガンプラ。
　モカの機体はＲＸ－０．ユニコーンガンダムの３体目の兄弟、フェネクスの改造機だった。
　背中に２枚装備されているサイコフレームが張り込まれた多機能兵装、アームド・アーマーＤＥが特徴的なこの機体に、Ｇ―アルケインのスカート型オプションユニットであるフルドレス・ユニットを装備されており、全身が金色から、黄色に塗装されていた。
「フェネクスにフルドレスをつけてるのか。かっこいいガンプラだね」
「フルドレスは[正装]って意味らしいんだ～。これが私のＧＢＮでの正装、Ｇ－フェネクロスよ～！」
　Ｇ―フェネクロス、フェネクスと服という意味のクロスを合わせた名前だろう。
「武装もいっぱいあるし、これなら連戦も楽勝～」
「ふふっ……心強いね……道に迷わなかったら」
「そろそろ離して～！　私蛾じゃないよ～？」
「だって絶対すぐどっかに行くじゃん!!!」
　Ｇ―フェネクロスの腕には、エクシアから伸ばされたケーブルが巻きついていた。
　光る物を見たらＺガンダム最終回のカミーユビダンぐらい気になってしまい、すぐ光に向かっていくモカの迷子を防ぐためである。
「そろそろ初戦の座標なんだからどっかに行かれると困るんだから……」
「カイト、なんだかママみたい～」
「俺はママではない」
「あ！　あとお姉ちゃんにも似てるな～」
「あー、兄弟がいっぱいいるんだっけ？」

「そうなんだよ～。この前ついに弟ができたんだ～」
「おー、めでたいね」
モカはこの前まで末っ子だったらしいが、遂に弟が出来たらしい。
本当かは知らないが、兄弟は５０人以上居るとか居ないとか。
「そういえばリクさんの彼女もお姉さんなんだっけ？」
「うん、１番上のお姉ちゃんなんだ～師匠に弟子入りしたのも、お姉ちゃんがきっかけなんだ～」
「へー……あ。そろそろ見えてきたね」
兄弟の話をしていると、目の前に透明な膜にドーム状に覆われた宙域が見えてきた。
ア・バオア・クーＳフィールド、そこが今回の連戦ミッションの舞台。
「今回のミッション、すごく難しいらしいから気をつけていこ～！」
「おー！　……何で仕切ってるの？」
「？　……流れ的に？」
「そんな流れだった……？」

ドーム状の膜の中に入った２人、すぐにレーダー確認する。
すると、早速、２体の敵性反応があった。
「よーし早速来たな……一体何が……来……る……」
敵機が近づいてきて、その姿が見えてきた。
距離がかなりあるにもかかわらず見えるその巨体は、敵を威嚇するにはじゅうぶんな大きさだった。
「うわ～デンドロビウムと……何あれ～？」
「あれは……確かザクレロ……がザクを食べてる……えぇ……？」
敵として現れた２体の巨体は、大量の武装を持ち、動く武器庫とも表現できるであろう巨体の、ガンダム試作３号機、［わがままな美女］デンドロビウム。
そして、ジオンのＭＡザクレロが、上部にＩフィールド発生装置とメガ粒子砲をつけて、口内にザクⅡを収納している、ザクレロ（ＧＰＢカスタム）だった。

その2体が、MGサイズで向かってきていた。
「見た限りデカイしすごい速いな……エクシアで接近して切るにしても……」
「ねぇ～もしかしてザクレロ上の装備ってフィールド発生装置かな？」
「そうだね……多分そうだ……ビーム効かないね……」
「……もしかして私のフェネクロス、相性悪いかな～……？」
フェネクロスの主な戦い方は、フルドレス、アームドアーマーED、ビームマグナムの三つでの射撃戦に特化していた。
モカが動くと迷子になるから後ろからのサポートをするというコンセプトのガンプラだったのだが、Iフィールドで三つ全てが効かなかった。
「「……まずいかも」～……」
連戦ミッション［ビルドビギニング］
――1戦目、生き残る事ができるか……――

ビギニング３０／変身と正体

「これで……どおだぁぁぁ!!!」
ザクⅡを放り出し、ザクレロを奪ったエクシアが、ビームナタを構えデンドロビウムに急接近する。
これに対しデンドロビウムはＩフィールドでビーム兵器が効かない事を予測し、武器庫から大量のミサイル、バズーカを発射する。
横降りの雨のようなミサイルの密度に一瞬怖気付くが、一気にザクレロのブースターを噴かす。
高い推力を持つザクレロなら、大量のミサイルとぶつかるのにかかる時間は3秒にも満たないだろう。
もっとも、ミサイルが当たるなら。
「モカ!!!」
「フルドレスって――眩しいんだから～！」
フルドレスユニットから流星群が流れていく。
星がミサイルを撃ち落とし、辺りに爆煙が満ちる。
黒い爆煙を突き抜けながらザクレロがデンドロビウムに突撃し

――Ｉフィールド・ジェネレーターにビームナタが突き刺さる。
「いっけぇ――!!!」
そのままデンドロビウムとすれ違い、Ｉフィールドジェネレーターを削ぎ落とす。
すれ違った瞬間に、ザクレロのブースターにビームサーベルを受けたが構わない。これで、ビームが効く。
「モカ！　頼んだ!!!」
「了解！　狙いうつぜ～！」

その瞬間、ビームマグナムとアームドアーマＤＥのチャージが完了する。
――ターゲット、ロックオン。
三本のビームが、デンドロビウムを、ステイメンを貫いた。

「ナイススナイプ、モカ」
「カイトもありがと～！　ナイス連携だね～！」
　２人とも、初めての連携にしてはかなり上手く行った方だと感じていた。
「それにしても１戦目から濃い相手だね……」
「まさかデンドロビウムとザクレロだとはね～」
「２戦目が怖いな……」
　１戦目が巨大なＭＳとＭＡと思ってなかった２人は激戦だった事もあり、それなりに疲れていた。ＧＢＮはゲームだから体を動かしても疲れないが、集中したら人は疲れるものだ。
「モカはまだ行けそう？」
「うん！　行けるよいける～！」
「はは……元気だな……」
「もうそろそろ次のミッションだよ～？　気合い入れていこ～」
「さぁ次は……何が来る……？」
　アラートが鳴り響く。次の瞬間、レーダーが敵を捕らえると同時に、１本の尖った物が飛んできた。
「うわっと⊠……今のは……？」
「ビグザムのクローだね～」
「次はビグザムか……ん？」
　レーダーによれば敵は１機、ビグザムならエクシアで近接を仕掛ければ何とかなるだろう、フェネクロスにもビームサーベルにビームトンファーがある。お互いにスピード型のガンプラなのでさっきよりかは楽かも知れない。
　――そう思ったが、何かがおかしい。
　ほんの少しの違和感があった、さっきのクローが戻っていく。そこでビクザムの全貌が露わになった。

「ちっちゃい☒」
そこに居たのは、ビグザムはビグザムでも１／５５０スケールのビグザムが一体、ポツリとこちらに向かって来ていた。
エクシアより少し小さいぐらいの背をしたビグザム、たった一機。
「かわいいね～。なんかカエルみたいだ～」
「……とりあえず、こんなに小さいなら！」
エクシアが接近し、ＧＮソードでビグザムを真っ二つにする。
「――あれ？」
捉えた！　そう思っていたビグザムは気がついたらもうそこには居なかった。
「カイト後ろ～！」
「なにっ☒」
気がついたらビグザムはエクシアの後ろでメガ粒子法のチャージを完了していた。
ビグザムの特徴的な武装の一つである、２８基のメガ粒子砲による、３６０。へのメガ粒子砲が放たれた。
モカのフェネクロスはフルドレスのスカートで、カイトのエクシアは必死に身体を捻って回避する。
「モカ気をつけて！　こいつ――速い！」
今、ビグザムはＧＮソードの斬撃を、全身からスラスターをふかし体を捻って避けた。
足の裏、メガ粒子砲の近く、頭の頂点、当然背中にもスラスターをつけていた。ここまで来るとビグザムの皮を被った別の何かであった。
斬撃を避けたビグザムは、エクシアを蹴り、その反動でフェネクロスのもとへ向かった。
「俺を踏み台にし――重っ☒」
「こっちにきた～☒」
その強力な脚力によるジャンプに、スラスターの加速も加わり、ビグザムとは思えないスピードで飛んでいく。まるで本当にカエルのようであった。

「え～っと……え～と……え～～い！」
迎撃法に困ったモカは、フェネクロスの脚を思いっきり後ろに引く。
「ビグザム～！　サッカーやろうぜ～！　君がボールね～!!!」
「何言ってるの☒」
そして思いっきり、ビグザムを蹴った。
ビグザムはスラスターを使い身体をひねる。
だが迷子にならない為に付けたワイヤーに引っかかる。
「うそだろ☒」
つけた本人も流石に驚いている。
「カイト～！　パス！」
全力でビグザムが蹴られた。
サッカーボールのようにぶっ飛ばされたビグザムは、パスと言うよりシュートで、超次元なサッカーのようだった。
「でもこれで！」
ビグザムが必死にもがくが、ここまでスピードがついてしまっては、いくらスラスターを吹かしても必ずエクシアの方へ向かってくる。
エクシアのＧＮソードなら、切れる。
「終わりだ！」
ＧＮソードを思いっきり振り下ろす。ビグザムがぴったりとタイミングよく振り下ろされた剣に斬られる。
熱いナイフに切られたチーズのように、ビグザムは切り裂かれた。

「いや～遂にラストバトルだね～」
「思い返せば凄い戦いだったね」
「だね～、ザクレロ奪ったり、ビグザムでサッカーしたり、ヅダが自爆してアトミックバズーカが誘爆したり～」
「あれは流石に不味かったね……」
これまで５戦、様々な機体と戦ってきた。

どれも強敵ばかり。というのも、今回は難易度高めの連戦ミッションらしく、敵の編成もテンプレとは違うとリクさんが言っていた。
そんなミッションも次で最後のようだ。今はラスボス前にインターミッションエリアでガンプラの修復と休憩をしている。
「そういえばモカ、ＮＴ－Ｄ使わないの？」
「あ～……使えるけど～……」

フェネクロスの元になったフェネクスは、兄弟機のユニコーン、バンシィと同じくＮＴ－Ｄを使えば、ユニコーンモードからデストロイモードに［変身］できる。
ＧＢＮでＮＴ－Ｄを使えば、作り込みによっては反応速度の上昇、サイコミュジャック、オート戦闘、サイコフィールドなど、ガンプラの完成度が高ければ高いほど様々な能力が使えて、今までの記録ではサイコシャドーまで出た事があるという。
かなり強力な力だが、何かあるのだろうか
ピピ
「ん？　あ、リクさんから」
「ん？　師匠～？」
リクさんからの通信のリクエストが入る。こっちが気になって通話しようと思ったんだろう。
『２人とも、大丈夫？』
そこにはさっき、誰かと会う用事が急に出来たらしく。
ビルドダイバーズのフォースネストに行ったリクさんと――
『モカ、元気？　それと……カイト、はじめまして、私、サラ』
「あ～！　姉さんだ～！　やっほ～！」
「あ、こんにちは。えっと……モカのお姉さんですよね」
『うん。よろしく』
リクさんともう１人、モカの１番上のお姉さんらしいサラさんが映っていた。
薄い空色の髪と瞳、紫のペンダント、腕回りには青いスカーフを巻いている。頭には薄い黄色の小動物が数匹乗っていた。

このふわふわした感じ、何となくモカと似てる気がする。
「モカ……この人がモカの1番上のお姉さんの……」
「うん……そして……師匠の若妻」
『ちょっと2人とも☒』
『……？　リク、わかづまって？』
『いやサラは気にしなくていいよ！　ほんとに！　……とりあえず、俺、少し話が長くなりそうだから、2人が終わってもそっちに行けないと思う』
リクさんはは予定が立て込んでるからこちらにはもう来れないらしい。
少し申し訳なさそうに言って居るのが画面越しでも分かった。
「大丈夫です。あと一戦だし、いい知らせを持ってきますよ」
「うん！　連携もバッチリだし、すぐに終わらせちゃうからね～！」
ただやる気は充分、なんやかんや今までも勝ってきたし、2人なら、きっと負けることはないだろう。
『……そっか。分かった！　2人とも応援してる！』
『モカ、カイト、頑張ってね』
2人はそう言い残し、通信を切った。
モカの方は、目に火が見えるぐらい燃えていた。
2人からの応援が、いい後押しになってるみたいだ。これは負けてられない。
「モカ、リペア終わったみたい。行く？」
「うん！　行こう！」
そう言って次のステージへ向かう。
次の敵は――

ア・バオア・クー本体に近づいた時、アラートが鳴る。
敵機が接近する合図。最後の決戦の開始。
レーダーは敵機をすぐ感知し、その方向に矢印を向ける。
そこに、光る羽を動かしながら、高速で向かってくる巨体があった。

「……でっかい」

こちらはＨＧサイズのエクシア、ＨＧより少し大きめのフェネクスベースのフェネクロス。

対して敵は――

「もしかしなくても……ＰＧかな～……？」

ラストバトルはＰＧサイズ、１／６０　ＧＰＢ―Ｘ８０ビギニング３０ガンダム。

ｉｆｓユニットをつけたことにより、性能が強化されたビギニングガンダム。

「モカ、いこう！」

「うん！　とりあえず勝負～！」

お互いに接近する中、先に仕掛けたのはビギニング３０ガンダム。

ビギニング３０がビームライフルを上に掲げる。ビームがビギニング３０の頭上で蠢き、それをビームライフルでなぎ払うようにしながら、２人へ巨大なビームサーベルのようにしならせながらぶつけてくる。

「うわっ☒――ライザーソードかこれ☒」

巨大なビームサーベルのように向かってきたビームに、なんとかエクシアの左脚が吹き飛ばされる程度のダメージで済んだ。

「うわぁ☒ぐねぐね動くビーム☒」

フェネクロスは持ち前の機動力で回避しようとしたが、こちらも攻撃がかすったビームマグナムが破壊される。

ビギニング３０ガンダムのビームは、ｉｆｓユニットにより、複雑な操作ができる。それがＰＧサイズとなれば、ただのビームだってライザーソード級になる。

回避に必死になっている間に噴射光である光の羽を広げて接近するビギニング３０は、背中から三本のビームサーベルを抜き、エクシアに振り下ろす。

「おりゃ！」
紙一重で回避し、肩の装甲が少し焼ける程度で済んだエクシアが、ＧＮソードを構えビギニング３０へ突貫する。
が、次の瞬間にエクシアはビームサーベルに切り裂かれる。
それは既に手にもっていた３本のビームサーベルではなく。腰にマウントされていた６本のビームサーベルだった。
ビギニング３０ガンダムはビームサーベルをファンネルの様に飛ばす事が出来る機体だ。６本のビームサーベル（ファンネル）がエクシアを囲んでいく。
「カイト！」
フェネクロスが飛んでいるビームサーベルにアームドアーマーＤＥのビームを当て、エクシアに逃げ道を作る。
なんとか隙間から逃げ出したエクシアは、フェネクロスに捕まって、２人で全速力で逃げていく。

「ありがとうモカ」
「ど～も～……どうしようこの子？」
「やっぱり最終戦となれば強いね……もうエクシア左腕しかない……」
「う～ん……」
このミッション、ビーム兵器対策が厳しすぎる。ビーム以外の攻撃にも何かしらの対策がされていて、高難度ミッションというか機体がとりあえずビーム以外でなんとかしろというミッションだった。
「……う～ん」
この理不尽さには珍しくモカが本気で悩むほどだった。
「もうＧＮビームサーベルしかないけど……近づくにもな……」
「でも師匠に、勝った！　第３話完！　って言いたいからね～」
そんな話をしてる間にもビギニング３０は、光の羽を広げてこちらに向かってきていた。
「……ねぇ、やっぱり勝ちたい～？」
「うんそりゃ……何かあるの？」

「……うーん、なくは無いけど……」
「……もしかして、ＮＴ－Ｄ？」
「！　……うん、多分これ使えば勝てるけど」
「……勝てるけど？」
「ちょっと……暴走しちゃうんだ」
　モカが不安そうな顔で言葉を紡いでいる。暴走する……　ＮＴ－Ｄのオート操作機能が発動して、敵も味方も倒そうとするという事だろう。
「前ね、それで、仲間を襲っちゃって、それで……」
　味方殺し、多分そのせいでＮＴ－Ｄを使うのを渋っていたんだんだろう。
「……大丈夫だよ」
「……ほんとに？」
「うん。もし襲われても……ほら、あの時とチャラって事で」
「……あの時？」
「ほら、初めて会った時に……その……エクシアが」
「あ～頭から地面に埋まったやつか～……でも私怖くなかったし迷惑かかってないよ？」
「……じゃ、じゃあこっちだって襲ってきても迷惑かかってないし怖くないわ！」
「……ふふっ……何それ～」
　モカの顔に笑顔が戻る。鮮やかな笑顔、この笑顔が彼女には似合う。
「……うん！　じゃあカイトがやられてもチャラね！」
「！　……ああ！　何なら逆に倒しちゃうよ！」
「左腕一本なのに強気」
　フェネクサスがビギニング３０の正面に立つ。ビギニング３０がビームサーベル（ファンネル）を展開しながらビームサーベルを３本構える。
「どうなっても知らないよ！」
　その時、フェネクロスの装甲の隙間が紅く光っていき、フェネクロスが変身する。

次々と装甲から紅く輝くサイコフレームが露出し、顔のツノが割れて、顔がガンダムタイプの顔が現れ――――

「――え？」

――ガンダムタイプの顔が現れると思っていたその顔は、ガンダムではなかった。

「あの顔は……？」

フェネクロスから現れた顔はアンドロイドのような、人型のロボットのような、少なくともガンダムではなかった。

驚くカイトを横目に、デストロイモードとなったフェネクロスが腕を前に突き出し――振るう。

次の瞬間、辺りを飛んでいたビームサーベル（ファンネル）が一斉にビギニング３０へ向かう。

アニメの劇中でユニコーンがクシャトリアのファンネルの支配権を奪ったサイコミュジャックにより、ビギニング３０のビームサーベルを奪ったのだった。

ビギニング３０が咄嗟にｉｆｓユニットを起動し、ｉｆｓユニット同士で中和をし、ビームサーベルからの攻撃を防ぐが、その隙に懐にアームド・アーマーＤＥが入り込む。

「いっけ～！」

アームドアーマーからビームが照射され、そのままビギニング３０を照射ビームの熱でビギニング３０がみるみるうちに切断されていく。

次の瞬間にはビギニング３０はバラバラに解体され、バラバラになったパーツが一気に爆発した。

「――すげ……」

ほんの数秒の出来事にカイトは唖然していた。

あの巨大なビギニング３０を一瞬で倒した事、そして、デストロイモード時に出現したガンダムでない顔に。

「モカ……その顔は……？」

その問いを聞いたモカは、通信で

「私、ＥＬダイバーって言って、人間じゃないんだ～」
「へー……人間じゃない？」
「うん！　ＧＢＮで遊んでる人達の思いから生まれた。電子生命体なんだ～」
「モカが急に難しそうな単語を」
「あ！　バカにした～！」
２人は、助けて貰って、認めて貰った仲で、何かあっても、２人で楽しんでいける。
そしてカイトは、モカがまだ制御しきれない暴走したフェネクロスから全力で逃げたのだった。

出会い／スタート

生まれて初めて見た景色の事を、私は覚えてる。
気が付いたら周りに緑色がいっぱいあって。
ゆらゆら揺れてるのをずっと見ていた。
触ってみたら固いような、思ったより柔らかいような。
何て言うんだろう、この感覚。
「あれ？いつのまに人が…」
気がついたら後ろに誰かいた。
自分と同じぐらいの背をした子。
その後ろにいるすっごくおっきい子。
顔が全然似てない２人、だけど、凄く仲がいいんだろうって、目を見たら分かった。
「ねぇ…貴方…名前は？」
名前、名前って…この言葉の事だろうか
「…モカ？」
これが初めての出会い。私は――私はモカ、彼女はアキちゃん

「もしかしてＥＬダイバーってやつなのかも。モカちゃん」
「えるだいばー？」
「ＧＢＮで生まれた電子生命体。そうだったら確か…ＥＬバースセンターだっけ……？あ、えっとね、モカちゃんはまず運営の人に――あれ？」
「このひらひら何～？」
「ああそこにいたんだ、それはちょうちょって言って―って!?そこ崖！危ない！戻ってーー!!!カムバーーーーック!!!」
「？」
ちょうちょ、というのを手に掴んでアキちゃんのもとへ戻る。
アキちゃんが言うに、私はＥＬダイバーってものらしい。電子生命

体？の事はよく分からないけど、色々あって彼女についていく事になった。
「かわいいね～ちょうちょ～」
「はは…うん、そうだね……」
　何だかアキちゃんがぐったりしてる気がするけど、取り敢えずちょうちょがすっごく手の内で動くから、一回手を離してあげる。また戻ってくるんだぞ～。
「ねぇアキちゃん」
「ん？どうしたの？」
　後ろの子に指を指しながら彼女の友達の事を聞く。
「その子、なんて名前なの？」
「ん？…あー、この子はね、ストライクガンダム」
「…すとらいくがんだむ？」
「うん、機動戦士ガンダムＳＥＥＤって作品のＭＳで…」
「…がんだむ？もびるすーつ？」
「…あーそこからなんだ……ＧＢＮで生まれたからって知ってるわけじゃないのか」
「…？」
「えっと…詳しくは確かバースセンターの人が教えてくれるんだっけ…」
　すとらいくがんだむ、この子はずっとアキちゃんを見ている。心配性みたいだ。アキちゃんもすとらいくがんだむを気にしてて、２人ともお互いの事を大切にしている…ってすとらいくがんだむは言ってる。
「…乗ってく？」
「…すとらいくがんだむに？」
「うん。きっと気持ちいいよ」
「…うん！」

　そこから、ストライクガンダムに乗って、空を飛んで、花を見て、ＥＬバースセンターに行く為にロビーに行って。

「多分そこの人が色々教えてくれるから、頑張ってね」
アキちゃんがそう言ってこちらに手を振って。
「ねえ」
「…？どうしたの？」
「また会える…？」
「――うん！うんうん！また会おう！」
初めて、友達ができた。

出会い／ダッシュ

アキちゃんの説明だと、この世界で、ＥＬダイバーがＧＢＮで生きる為には、まず『リアル』って場所にあるＥＬバースセンター行く必要がある。

が、リアルに行く準備にはすこし時間がかかるらしく、しばらくこのロビーに居る事になった。

だから、ロビーをしばらく歩いてみる事にした。

私はさっきから周りの物が気になっていたので探索である。

それにさっきアキちゃんからビルドコインってやつを貰った。

お店？　で人にあげると美味しい物とかガンプラのパーツとかが貰えるらしい。

ガンプラのパーツはストライクガンダムの腕とかだと教えてもらったが、美味しい物とは何かまだ知らない。

アキちゃんから「一回何か食べてみたら？」

って言われたしちょうどいい。

まずはロビーで美味しい物を探してみる事にした。

「美味しい物～♪　美味しい物～♪」

どんなものなんだろう。

美味しい物、美味しい物……

「……美味しい物ってどれ？」

そういえば、美味しい物ってどんな形をしてるか、聞いてなかった。

このままじゃあ美味しい物を食べる事が出来ない。

「ふふふ……お困りのようね？」

「ん～？　だれ～？」

「私はマギーって言うの、貴方がモカちゃんよね？　運営から連絡があって来たの。ＥＬバースセンター側の準備が終わるまでの少しの間、産まれたてのＥＬダイバーである貴方を助けてあげて。ってね」

急に私の前に現れたマギーって名乗った人は、私より、アキちゃんよりおっきくて、木とストライクガンダムより小さかった。

髪が紫で、何というか、ムキムキしていた。

なんとなく意識的に明るく、警戒させないような声で話している気がする。
悪い感じの人ではなさそうだ。
胸がおっきくて固かった。
「イヤん!? 急に触らないで〜! 私はセクハラされに来たんじゃなくて、貴方を助けに来たのよ!」
「助ける……?」
「そう! 何か困った事があったら言ってごらんなさい。このマギーさんが、何でも答えてあげるわよ!」
「ん〜……あ! じゃあ、美味しい物! 美味しい物ってどんな形!?」
マギーさんは、私を助けてくれるらしいので、さっきから気になってるけどどんな形か分からなかった、美味しい物について聞いてみた。
「うーんそうねぇ……美味しい物、と一言で言ってもイロイロあるのよねぇ」
「いっぱいあるの?」
「そうよ、いっぱい。例えば……あ! あれとかいいんじゃないかしら?」
そう言って、マギーさんが指を刺した方にあったのは……

白いような、茶色のような水の中に、黒い丸がいっぱい沈んでいる。
「これは?」
「これは、タピオカミルクティーって言う名前ね。最近流行ってるらしいわよ。何でもその黒くてモチモチのタピオカが美味しいとか。……まだ流行ってたかしら?」
「タピオカ……」
目の前のタピオカをじっと見つめる。
黒い丸、ずっと見ていてもそれ以外何も分からない。
「これが美味しいの〜?」

「そうね、そのストローを口に入れて一気に吸い込むの、よく噛んで食べるのよ。喉に詰まっちゃうと大変だからね。さぁ！　そのままタピっちゃいなさい！」
「タピる～！」
その言葉を合図に、黒いツブツブが透明な筒から口の中に入る。
口に来たタピオカを噛んでみる。
もちもち、もちもち。
……楽しい。
「～～♪」
「ふふっ、気に入ってくれてよかったわ」
「これが美味しい？」
「ええ、きっとそうね。そんなに楽しそうで、嬉しそうなんだもの」
嬉しい、これが嬉しいかと噛み締める。
もちもちとタピオカを噛んでは飲んで、茶色の水も飲んで。
また食べて食べて食べて……
「……ふふっ、気に入って貰えてよかったわ。飲み終わったらご馳走さまでしたって言うのよ」
「ご馳走さまでした～」
「はやっ!?」
「マギーさ～ん！　次はアレ食べたい！」
「……ふふっ。なんだか風みたいな子ね。いいわよ、行きましょう！」
それからいろんな物を食べた。ハンバーガーだったり、アイスクリームだったり、うどん、ラーメン、クラブケーキ、パエリアにピザにお寿司だったり、どれも美味しくて、幸せで、こんなに嬉しい事はない。
んだと思う。多分。
「美味しい～」
「いっぱい食べるのね……こんなに食べる子は初めてみたわよ。いつかＧＢＮ大食い選手権に出てみたり――」
そうやって私がクレープを食べてる時、マギーさんの前に青い四角が現れた。

「なになに……モカちゃん。運営から準備が出来たって連絡が来たわ。そのクレープを食べ終わったら。貴方にはリアルに行ってもらうわ」
「お～ついにか～」
「もう食べ終わってる……食べるの早いわね。そのクレープさっき買ったはずなのに……ふふっ、流石の私も奢り過ぎたわ、久しぶりに稼がないとね。さて、リアルに行くために、そこのポータルの中に入ってもらうわ」
「あの透明な丸？」
透明な筒みたいな物に指をさす。
何だかあそこは別の所に繋がっている気がする。
ここ……ＧＢＮじゃない別の何処か。
多分そこがリアルなんだろう。
「ええそうね、さあ入って入って。リアルでは、貴方のお姉さんも待ってるわよ」
「お姉さん？」
「そうよ。サラちゃんって言ってね。とっても綺麗で可愛い子なのよ」
「へ～」
「よし、今行くって連絡したわ。さぁ、いってらっしゃい！」
「は～い、マギーさんじゃあね～！　いっぱい美味しい物ありがと～！」
「なぁにいいって事よ！　また会いましょ――!!!」
マギーさんの返事を聞いた後、ポータルの中に入る。
するとゆっくりと透明なドアが閉まる。
次の瞬間、急に目の前が真っ暗になり。
浮遊感に襲われる。
私は、いつのまにか青い空間を流されるように飛んでいた。
強風が正面から吹いてくるみたいに少し息苦しくて、目を瞑る。
が、それも直ぐに終わった。
気がつけば浮遊感も、強風も無くなっていて、地にしっかりと足が

ついている。
ゆっくりと、少しずつ目を開く。
目を開けるとそこにはおっきい人が2人いて、同じ大きさの綺麗な人がいた。
なんとなく分かった。この同じ大きさの、綺麗な、白いような、青いような人は、私と同じだ。
「こんにちは、私、サラ」
その人はサラと名乗った。マギーさんから聞いた、私のお姉さん。

そうしてリアルに行ってから、ＥＬバースセンターの職員であるシバ（シバっち、と呼んでいる）とコウイチに、コウイチの妹らしいナナミちゃん。
それに、私の姉さんのサラ姉さん。
この人達に、リアルの事とか、ＧＢＮの事とか、色々な事を教えてもらった。
ガンプラバトルっていうのが楽しいって事、リアルの人はみんな大きいって事、ここだとストライクガンダム達ガンプラは私と同じくらいの大きさだって事。
あとサラ姉さんの仕事を手伝ったりした。
この世界で一旦、最低限の知識ってやつを全部教わったら、またＧＢＮに行く事が出来るらしい。
そういう訳でしばらくリアルとＧＢＮの事について勉強していたら、もう1人、姉がシバっちを訪ねて来た。
「……メイ、何があったこれ」
「落ちた」
「……そういえば足の予備パーツを渡すのを忘れていた、少し待ってろ」
そのお姉さんの名前はメイ、初めて見たメイ姉さんはかっこいい人

と思った。
黒髪が綺麗で、目がキリッとしてる。
そのせいか雰囲気がふわふわじゃなくて、カッターみたいに尖ってる。
「貴方もお姉さん～？」
「……ん？　あぁ、お前もＥＬダイバーか、メイだ」
「お～クールだ～。モカで～す」
「モカか、お前はなぜここに？」
「ここに住んでるんだ～」
「なるほどな、後見人が居ないのか」
「うん！」
「そうか」
話してみると、彼女は淡々と言葉を置いていく。
けど、小さな子に優しく語りかけるような顔をしていた。
もしかして、メイ姉さんは、雰囲気が怖く見えるだけかもしれない。
「メイ姉さんは、ガンプラバトルやってるの～？」
「ああ、やっている」
「やっぱりたのしい？」
「そうだな、楽しい……のだと思う」
「強いの？」
「……さぁ、どうだろうな。私より上の実力を持つ者は星の数ほど居る。だが私もそれなりに勝利はしてきた」
「お～。一回見てみたいな～」
「機会があれば戦ってやろう」
「ほんと～！」
思わず目を大きく開く。
ガンプラバトル、アキちゃんもコウイチもシバっちもやっていると聞く。
ここだと私と同じくらいのガンプラが、ＧＢＮに行くと大きくなって、私達がそのガンプラに乗って戦うと聞いていた。
メイ姉さんにガンプラバトルはどんな感じか聞いてみると、メイ姉

さんいつもウォドム・ポットって子の中に入って、最近出来た仲間と一緒にばんばん敵を倒してるらしい。
仲間……私もアキちゃんと、やってみたいな――
という訳で、思い立ったが吉日、なんて言葉もあるらしいし、早速シバっちに自分のガンプラが欲しいと提案する事にした。
私はまだお金は持てないのだ。
だからまだここの近くにある模型店でガンプラを買えない。
「ねえシバっち～？」
「何だ」
「私もガンプラバトルしたい！　ガンプラ頂戴！」
「……別に自分を使えばいいだろう」
自分を使う。
というのは、リアルに居る時、ＥＬダイバーの体はガンプラで出来ているらしく、ＧＢＮにログインする時には、ガンプラをスキャンする際に、自分の身体をスキャンして事でログインする。
その際にスキャンされは体は、ＧＢＮで自分の機体として搭乗する事ができる。
自分の体に自分が乗る。
確かにそれでもいいが……私は
「メイ姉さんみたいに自分のガンプラに乗って戦ってみたい～！」
自分で作ったガンプラで、ＧＢＮを駆けてみたい。
「……そうか、じゃあどのガンプラがいい？」
「いいの～!?　やった～！　えっとね～……」
素直に要求を受け入れてくれた事に内心驚きながらも、どのガンプラがいいか考える。
アキちゃんとストライクガンダムと一緒に遊びたいし、メビウスとか、スカイグラスパーとかがいいかも知れない。
案外イージスガンダムとかフリーダムガンダムとかだって。
と考えていると、一瞬、横の棚に並べられてあるガンプラの箱が光った気がした。
気がしただけかもしれないし、幻覚かもしれない。

それでも、気がついたらもう答えは一つだった。
この子と行きたい。
「――フェネクスがいいかな～！　メイ姉さんのウォドムみたいにガンプラバトルしたい！」
「……メイみたいにか」
しばらくシバっちは何か考えこんだ後、近くのコウイチと何か話し始めた。
「……え⁉？今からまた新しいの作るのかよ☒」
「別にいいだろ2人でやりゃ早い、アイツにも手伝わせる。それにいいアイデアが浮かんだ」
「はぁ……まだロードアストレイ完成してないだろ……？」
少し経ってからこっちに戻ってきたシバっちは、いつもとは少し違う、ギラついた目をしていた。
今から楽しみな事があるのを待ちきれない。たまにこのお店に来た人がしてる目。
やる気に満ち溢れてる。
「作るぞ、ただし、お前が作れよ？」
「やった～～!!　わ～い！」
そうやって、私がニッパーを握って、いろんなパーツを切って、コウイチとシバっちが作ったパーツを中身に詰めて作った子が私のガンプラ。Ｇーフェネクロスだった。
「どうだ？」
シバっちが椅子に座りながら着心地を聞いてきた。
いっぱいうごくし、軽い、すぐ脱げるのに取れにくい。
ＮＴ―Ｄの変身も再現して、私の髪のパーツだったフルドレスユニット（って言うらしい）をお尻あたりにつけて、黄色に塗装した
この子は……――
「……いいけどなんか違う」
「あ？　ちゃんと中に入れるようにしただろ」
この子――Ｇフェネクロスは私のＧＢＮでの服ってコンセプトの

ガンプラだった。
　メイ姉さんのウォドムポットみたいにかっこよく戦いたいと言ったつもりだったが、中に入る事になろうとは……
「……そういえば、メイ姉さんのウォドムポットと言い、フェネクロスといい、何で中に入るの？　リゼみたいにしてもいいと思うんだけど～……」
　リゼは私のお兄さんで、リアルでの体が他のＥＬダイバーと違ってガンダムらしい。
　ガンプラにビルドデカールと呼ばれる物を貼ったら、ＥＬダイバーの意識がそのガンプラに宿る。
　フェネクロスだってそうすれば楽なのに何故わざわざ私が着れるようにしたんだろう。
「あ？　……かっこいいだろ」
「え？」
「そいつもウォドム・ポットみたいにいつでも脱げるようにしてる。いつもはフェネクロスで戦って、いつか脱ぐ時が来たら、周りのやつが『え!?　モカがあのＥＬダイバーだったのか!!!』『ダイバーランクも低いしログイン日数も少ないのに強いのはＥＬダイバーだったからか……!!!』って驚くだろ……ふふっ、我ながらいいアイデアだったぜ……！」
「……かっこいい？」
「あ!?　隠されたギミックってのはカッコいいだろ!!!　ユニコーンモードだってナドレだってカッコいいじゃねぇか！」
「……え～？　シバっちがそう思っただけじゃない？」
「なんだとぉ!!!???　おいコウイチィ!!!」
　シバっちが大事でコウイチを呼んだら、部屋のドアからコウイチが少し怒りながら出てきた。
「何だよいきなりデカい声だして!!!　一階からも聞こえたぞ！　店のお客さんに聞こえたらどうするんだよ！　そんなデカい声で呼ぶ事ないだろぅ!?」
「ユニコーンガンダム系のユニコーンモードへの変身とかガンダム

ヴァーチェの装甲にガンダムナドレが隠されてるのカッコいいよなぁ!!!」
「何言ってんだよ!?

かっこいいに決まってんだろ!!!」
「ホラ見ろ!!!」
「なんでぇ～!?」
その次の日、『類は友を呼ぶ』ってことわざを知った。

「……よし、ちゃんと着れた！」
Ｇフェネクロスを着た後、ＥＬバースセンターにあるダイバーギアの上に乗り、ヘッドセットを被る。
≪ＩＤ　ｄａｔａ　ｃｏｎｆｉｒｍ．≫
「初めてガンプラを動かすんだ、どうせなら楽しんでこい」
「わかったよシバっち～！」
≪Ｐｌｅａｓｅ　ｓｃａｎ　ｙｏｕｒ　ＧＵＮＰＵＬＡ．≫
身体の周りを光の粒子が包んでいく。
「行く当てはあるの？　良ければだけど、いい場所何個か教えておくよ？」
≪Ｌｏｇ　ｉｎ　ｄａｔａ　ｃｏｎｆｉｒｍ．≫
いく場所は決まってる。
「アキちゃんって子に会いに行くんだ～！　だからコウイチは心配し

なくていいよ～！」
「アキちゃんって、モカちゃんを見つけてくれた？」
「うん！　ナナミちゃんにはそう言えば話したね～！」
「……何があったら連絡しろよ」
「行ってらっしゃい、モカちゃん」
「行ってらっしゃい！　後で私とも遊ぼ！」

「うん！　モカ、いってきま～す！」
≪Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？≫
≪Ｄｉｖｅ　ｓｔａｒｔ　ｎｏｗ！≫
その日から、私はＧＢＮの大地を駆け出した。

もう／私が居たから

「……凄い、これ、モカちゃんが作ったの？」
「どや～」
　ログインしてからロビーで早速アキちゃんに会って、すこし話した後にミッションを受ける事になった。
　ミッションに行くためにハンガーに行ったら、アキちゃんはフェネクロスを褒めてくれた。
「いっぱい手伝って貰ったけど、ちゃんと私が作ったんだ～！」
「やるねー、モカちゃん、ビルダーの才能あるかもよ」
「やった～！」
　そう言った後もアキちゃんがフェネクロスを褒めていく。ここの塗装が綺麗とか、ヤスリがけもしっかりしているとか、ミキシングもうまくいってるとか。
　いっぱい褒められて、フェネクロスも嬉しそうに黄色の装甲を光らせる。
「フェネクロスも喜んでるよ～」
「褒めた甲斐があったかな？　……よし、機体の確認も終わったしそろそろ行く？」
「うん～！　確か、今日はいっぱいミッションやるんだよね～！」
「そうそう。戦闘するミッションもあるけど、その時は私に任せて！
　これでも結構強いんだ、私」
　そう言ったアキちゃんは自分のストライクに視線を向ける。エールストライカーを装備して、肩にソードストライカーの対艦刀を付けているそのストライクは、どっしりと、金属の様に光りながらハンガーで佇んでいた。
　ストライクにきらりと照明の光が反射する。ストライクもやる気充分のようで、頼もしい限りだ。
「じゃあいこ～！　楽しみだ～！」
「うん！　いっぱい楽しもう！」
　その言葉を合図にして、その日から、２人でいっぱい遊んだ。

初めて受けたミッションはそれはもう楽しかった！
ベアッガイⅢに森から取ってきた赤ハロリンゴを渡すミッション、まさかバウンドドッグ、ガイアガンダム達との激しい縄張り争いに発展して、一族の存亡を賭けた戦争に発展するとは思わなかったが、並み居る敵をアキちゃんとストライクがバッタバッタとなぎ倒していく姿はまるで阿修羅みたいでかっこよかった。
ボスとし現れた赤ハロリンゴを乗せたネオ・ジオングマも、見事にストライクが一刀両断、ミッションクリアの報酬としてリンゴジュース一回無料券を貰い、２人でベアッガイ証のリンゴジュースを飲んだ。あのリンゴジュースは凄く美味しかった。
その次はガンプラレースに参加した、基本的には車でやるレースと変わらないが、時々ボール（ここで言うボールは丸い棺桶でお馴染みのボールではなく、バレーボールと言うスポーツで使うボールだった）が横からレース参加者に向かっきた。アキちゃんとストライクは、そのボールを繰り出してくる砲台の様な機械をバルカンで打ち抜きながら進んでいき、見事に3位に入賞した。
私も、フェネクロスのスピードのおかげで、８位になる事ができた。
そうやって何度も何度もミッションをしていくのは楽しかったし、その度に私の操縦技術も上がっていった。

「そっこだ～！」
フェネクロスのビームマグナムのエネルギーチャージが完了する。瞬間、ビームマグナムに一気にビームを吐き出させる。
放たれた禍々しくも感じる赤のビームがリーオーを纏めて３機撃ち抜く。
９回目のミッションにしてやっと、初めての敵機撃破だった。
「やった～！　初撃破～！」
「やるね！　私も負けられない！」
そう言葉を紡ぐ間にも、両手にビームサーベルを掴んだエールストライクがすれ違うだけで、嵐の様な勢いでリーオー達を破壊していく。

大群の中を突っ切り、ざっと５０以上リーオーを倒したら急反転、今度はビームライフルから飛び出した光が蹂躙を始める。
『攻撃』を名前とするストライクだが、こんなに敵を薙ぎ倒すストライクは初めて見た。アニメで活躍していたストライクより激しい攻撃は、凶暴な鮫の様だった。
「お前でおしまい！」
仲間が倒されて、一体だけ残ったひとりぼっちのリーオーの顔に、緑のビームが吸い込まれるように当たる。頭部を貫かれ、爆砕するリーオー。
一呼吸おいて鳴り響いたバトル終了を知らせる電子音。
リーオー１００機を倒すミッション、私とフェネクロスが３機、アキちゃんとストライクが９７機で合わせて１００機。
「モカちゃんおつかれー！」
「おつかれ～、やっぱりアキちゃん強いね～」
「ふふ、ありがと」
「やり切った～！」と言いそうな笑みでアキちゃんが言葉を放つ。こんなに明るく、人畜無害そうに笑っているけど、このミッションを２人で受ける前に、ザムザザー３機を単機撃破していたのを私は知っている。
動きに無駄が少なくて、滑らかで、美しくて。
何人か他のダイバーの戦いを見てきたが、その中でもアキちゃんの実力には目を見張る物があった。
「モカちゃんこそ上手くなって来たじゃん。ほら、初めて撃破したし、それも一気に３機も」
「うん！　いや～このまま上手くなっていつかアキちゃんの隣に立てるようにならないとね～」
「あら、別に私を超えたっていいんだよ？」
それはきついな～と、苦笑する。アキちゃんは上位ランカー、まだ初めて２週間くらいの私ではいつになるか。
「アキちゃんの強さなら、あのチャンピオンも倒せるかもね～！」
ＧＢＮ最上位ランカーであり、ＧＢＮ１位の称号をいくつも持って

いる、ガンダムＡＧＥ系の機体を愛用している、ＧＢＮのサービス最初期から何年もチャンピオンの座を護り続けているダイバー、クジョウ・キョウヤ。
彼と、彼の率いるフォース（軍隊という意味らしい）であるＡＶＡＬＯＮ（アヴァロン）は、ランキングを見るといつも１番上に居る。
だがもしかしたらアキちゃんなら勝てるかも――
「……」
「……あれ？」
アキちゃんが複雑そうな顔をしている。生身で龍に挑めと言われたような表情だった。
「……モカちゃん、それは無理かも……」
「……そりゃあ、チャンピオンって凄く強いんだろうけど……そこまで？」
「うん、アヴァロンの戦闘とか、見たことある？」
「一応……一回なら」
「なら今からオススメの動画を何個か見るね。……本当に強いんだ、チャンプも、チャンプの率いるアヴァロンも、私も足下に及ぶかどうか……」
アキちゃんバトルが得意と自負していたのだが、そんなアキちゃんですら届かない人、どんな人なんだろうか。
「アキちゃんはチャンプと会った事あるの？」
「いや、動画とか、中継でしか見た事ないかなー。いつか会ってみたいな」
「私も気になってきたよ～」
いつか偶然会えたりしないだろうか、どんな人なんだろうか、そんな事を思いながらアキちゃんの前の映像を覗き見る。
「うわ――」
ＧＢＮのチャンピオン、その戦いはヒロイックで、圧倒的だった。
レジェンドガンダムのバックパックを引き裂いたり、グリモアがベースになっている改造機と激闘を繰り広げていた。
大規模なフォースバトルでも、２対１の劣勢で負けてしまっていた

が、中盤まで敵２機を圧倒していた。
「すご～い……」
「勝率は確か９割なんだよね、チャンピオン……」
「ひえ～９割……」
「この戦い以外全然負けて無いんだよ」
「もはや恐ろしいよ～。よくこの２人は勝てたね～」
そう言って２つのガンプラを指差す。
空色のダブルオーガンダムベースと機体と、赤い鬼のような機体、こっちは……だいぶ改造されているが、ガンダム試作２号機だろうか？　一目見れば、どちらも完成度が高いのがわかる。
「そっちのダブルオーは、フォースＢＵＩＬＤ（ビルド）　ＤＩＶＥＲＳ（ダイバーズ）のリーダー、リクのガンダムダブルオースカイ、こっちの機体はフォース百鬼（ひゃっき）のリーダー、オーガのガンダムＧＰ―羅刹だね。どっちも最近どんどんＧＢＮの上位に食い込んでいってる」
ＢＵＩＬＤ　ＤＩＶＥＲＳと百鬼、アキちゃんはこの二つのフォースも、尊敬が篭った声で話していた。
きっとこの２チームもかなりの実力なんだろう。
「私もいつかフォース入りたいなー」
アキちゃんがそうぼやきながら空を見上げる。フォースは確か２人でも１人でも組める、なら
「私と組めばいいじゃな～い」
フォースを組んで色んな人と戦う。それは私もＧＢＮでやりたかった事だ。メイ姉さんだって、最近フォースの仲間と戦ってるそうだし、きっと楽しいに違いない。
「ふふっ、ありがとう。それもいいかも……いや、そうしよう！」
「じゃあじゃあ！　名前何にする？」
「その前に、モカちゃんのダイバーランク上げなきゃ、モカちゃん、今のランクじゃあフォース入れないよ？」
「え～⁉？早くあげる！」
「じゃあ、もうちょっとミッションやってく？」
「うん！」

この言葉をきっかけに、もっと2人で居る時間が増えた。初めて出来た友達だった。色んな事を一緒に経験して、色んな事を笑って。
そんな日々がしばらく続いていた。
そんな時に、チャンピオンと一緒に戦う機会がやってきた。

「実況で盛り上げたのはそういう事かよ！」
「いっちょみんなでクリアしようぜ！」
「特別ボーナス出るってマジ!?」
「不正アクセスは許さない！」
「サークルウィップ！」
「時空を越えての迷惑行為、マナー以前の問題だ！」
星の数ほど居るように思える敵に、星の数より多く思える味方と立ち向かう。
「これぞ！　海のロマンだ！」
「大丈夫か!?」
「「ハード・インプロヴィゼーション!!!」」

ここに居る全員が共に戦う知らない誰かを守って、一つの敵に立ち上がる。
生配信されていた、近ごろ注目度が上がったていた動画でしか見れなかったミッション、そのミッションに、しかも最終決戦に、上位ランカーと一緒に、チャンピオンと一緒に戦える機会が来たのだ。
２０００万のダイバーが手を取り合って戦わない理由なんて、どこにもなかった。
「え～い！」
「もらった！」
かくいう私もその1人で、アキちゃんもその1人だった。
次から次えと襲いくる黒いウィンダム、ドートレス、ダナジンに、地上には大量のブルートと目玉のような紫のもの。
その一つ一つを、知らない誰かと肩を並べて倒していく。

「アキちゃん！」
「うん！　結構数多いね！」
　１００万なんて余裕で越えていそうな数の暴力、紫のビームが向かってくるのを必死に避けるのでも大変だが、後ろから来る味方の攻撃にも気をつけなければならない。
「このままじゃまた押されちゃう～！」
「最前線の人も頑張ってるし、こっちも頑張らなきゃ！」
　そんな会話も、飛んでくるビームの処理にかき消される。
　とにかく数が多くて余裕がないが、最前線の人達はたった今ボスと交戦中、その間、こちらも敵を抑えなければ、挟み撃ちにあってしまう。
「そこの奴ら！　手を貸すぜ！」
「あんた達だけに無茶させないよ！」
「！　、ありがとう～!!」
　幸い、こちらも次々と援軍が来ている。
　これならまだ持ち堪える事が出来るが、それでも押されている敵の量には流石に運営にやり過ぎだと言いたくなる。
「何か手は――そうだ！」
　閃いた、というより、忘れていた。フェネクロスはユニコーンガンダムの兄弟を基に作成された機体だ、ならば当然、アレが使える。
「ＮＴ－Ｄ、いっけ～！」
　瞬間、フェネクロスの体が変化する。内側に隠されていたサイコフレームが露出され、紅く輝きを放つ。
　頭部アンテナが二つに割れ、ガンダムの顔――ではなく、私の顔が現れる。
「うぇ!?　何そのＮＴ－Ｄ!?」
「ふふん！　いっけ～フェネクロス！」
　アキちゃんも思わず驚愕したようで、シバっちの感覚も当てになるものだな。なんて思いつつ、アームドアーマーを分離し、黒いウィンダム達の方向に飛ばす。
「……あれ？」

飛ばす、筈だったアームドアーマーが一向に分離しない、いや、それどころか機体が操作を受け付けない。
「あれ？　あれれ？　何で～!?　操作出来ないよ!??」
「え……しまった！　不味い！」
咄嗟にアキちゃんが私を抑えに掛かる。
ストライクはビームを躱しつつ一瞬で距離を詰め、フェネクロスの肩を掴もうとする。
その時、フェネクロスは赤い光に包まれる。
そこからは速かった。
気がつけばフェネクロスは一瞬でストライクの後ろに回り込んでいた。
「しまっ――!?」
ほんの一瞬で、彼女はエールストライカーを外すという最適解を実行した。
1秒も満たずに、エールストライカーはフェネクロスのその手で破壊される。
「うわ!?　フェネクロスやめて!!!」
必死に操縦桿を動かすがフェネクロスは何も聞かないで、アームドアーマーを飛ばす。
「やめてって！　やめてよ！」
二つのアームドアーマーは、それぞれ反対方向を向き、黄色のビームを放つ、黒い敵も、近くの味方も構わず乱れ撃つ。
「何してんだ!?」
「何!?　フレンドリーファイア!??」
「あのフェネクスか！」
味方の出したファンネルに手をかざす。すると犬をしつけるようにファンネルに命令をし、周りのガンプラを攻撃していく。
「止まって！　止まって止まって！」
NTーDを止めようとボタンを押す、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も。
「……なんで」

なぜ止まらない、なぜか止まってくれない
「まだやりたいの……フェネクロスは」
これじゃあ、仲間に迷惑だ、彼女に迷惑だ。
早く止まってくれ、早く。
「ダメだよ止まってよ！　止まって!!!!!!!!」
そう言って、今までで1番強くコンソールを叩く。
「……あ」
だんだん装甲がユニコーンモードに戻っていく。
足が戻り
腕が戻り
顔が戻る
「やっと……止まった……？」
赤い光が消えたフェネクロスは、同じ光で浮いていたアームドアーマーと一緒に地に落ちる。

安心して力が抜け、コックピットにへたり込む。
空を見上げると、光の粒子が空へと登って行っていた。
どうやら、ボスを倒してくれたようだった。
「――モカちゃん！」
「あ、アキちゃん！」
気がつけば、後ろにはアキちゃんと少し傷の付いたストライクが居た。
声色で、心配してくれた事がすぐに分かった。
「良かった、無事？」
「うん……えっとね」
フェネクロスが立ち上がり、アキちゃんの方を向く。
「おいお前！」
その瞬間、上から声がした。
上を向くと、さっきまで近くに居て、私を助けてくれたダイバーだった。
「なんで仲間を撃ったんだよ！　一緒にあいつら倒してだじゃないか

!?」
「え――えっとそれは……」
怒っている。直ぐにそう理解できた。
直ぐに謝らなきゃいけないのに、何と言って謝ればいいんだろう。
怒られた事なんて初めてで。
「撃破スコアが欲しかったのか！　迷惑な事しやがって！」
「違う！　この子はそんな事しません！」
アキちゃんが反論する。
自分は、早く何とか……
「周りを見てみろ！　こんなに仲間を撃破して！　なんて戦い方だ！」
「……ごめんなさい」
周りにはさっきまで一緒に戦っていた人達のガンプラが転がっていた。
助けに来てくれた人達、心配できてくれた人達、それなのに
「みんなで楽しんでたんだ！　邪魔しないでくれ！」
「……はい」
そう言った後、その人はどこかへ去って行った。
「モカちゃん……」
アキちゃんが何が言いたそうに声を出す、彼女にも迷惑をかけてしまった。
私が居たから、こんな悲しい顔をさせてしまった。
「アキちゃん……私」
足下が水で濡れている。目が曇って、自分の手もよく見えない。
「多分……一緒にいちゃだめ」
「そんな事！」
「また同じようなことをしちゃうかもしれない……」
さっきのフェネクロスはどんな風に見えてたんだろうか。
「私、当分、ここに来ない」
――きっと、悪魔の様だった